



「チーム安城」で子供たちの自尊感情を育てる

校長 吉満 ふくみ



新年度が始まり約2か月が経ちました。今のところ、大きな事故等もなく、子供たちは元気に過ごしていて、「〇〇さん、おはようございます。」という相手の名前を入れた挨拶や朝のラジオ体操、朝の会の歌声等、大人の私が子供たちから元気パワーをもらっている日々です。子供たちを日頃から支えてくださっている保護者や校区・地域の皆様には、まずは感謝申し上げます。

さて、今回は、5月の家庭教育学級時に話した「自尊感情」と「レジリエンス」についてです。



【諏訪神社から見える安城港】
私の好きな安城校区の風景です

子供たちが将来、自分で問題に立ち向かっていくための大切な軸となる自尊感情、そして、それに支えられているレジリエンス(逆境力、回復力)、その育成には乳幼児期からの大人との関わりが大きく影響されると言われています。

日本ウェルネススポーツ大学の近藤 卓教授によると、自尊感情は「基本的自尊感情」と「社会的自尊感情」の2つから成り立っており、基本的自尊感情を「ありのままの自分」、社会的自尊感情を「すごい自分」と捉えて、この2つをバランスよく育むことが大切となります。

「社会的自尊感情」と「基本的自尊感情」についての詳細は下図のようになりますが、予測困難な社会を生き抜く際に必要な「レジリエンス=へこたれない力」を子供たちに育むには、基本的自尊感情を、周りの大人たちが意識してたっぷりと厚みがあるものにしていくことが重要となります。

基本的自尊感情は、日常の中での「体験」の共有と「感情」の共有を繰り返すことにより、少しずつ育まれます。家庭や地域では、日常的な体験を「一緒に」することです。例えば、一緒に本を読んだりテレビを観たりする、一緒に同じ物を食べる、一緒に自然体験や文化・芸術体験をする…。

「社会的自尊感情」と「基本的自尊感情」



自尊感情とは



- ・ 「生まれてきてよかった」、「自分にはできることがある」等、**自分自身を基本的にかげがえない価値ある存在とする感情**
- ・ **学習意欲の向上や良好な人間関係を築こうとする源となる**
- ・ 自尊感情が育まれることにより、子どもが**自他のよさや違いを認め、尊重する具体的な態度や行動につながっていくもの。失敗しても立ち直る心の育成にもつながっていくもの。**

ありきたりのことですが、一緒に本を読んでおもしろいと思った気持ち、花の匂いをかいてみて「なんかちょっと臭い」と思った気持ち等、その時の喜怒哀楽といった感情を共有しましょう。日常の中で湧いてくる様々な感情を大人たちに否定されることなく一緒にその時間を過ごすことで子供たちに「これでいいんだ」「こう思っているんだ」「自分のことが好きだ」という基本的自尊感情の土台を作る材料となっています。このことを意識して「チーム安城」で子供たちの自尊感情を育てていきましょう。

5月から6月にかけて、私が思い出すのは10数年前に亡くなった父親とのことです。ホテルに勤めていた父は休みらしい休みもなく、枝豆やとうもろこしの出荷もしていました。中間テストの時期と重なり、「テストもあるのに…」とぶつぶつ言いながら少しだけ出荷の手伝いをしていた私は、父親が握ったおにぎりの味が忘れられません。なぜなら、父が手を洗った石鹸の味が微妙に残っていたからです。「お父さん、またなんか塩とは違った石鹸みたいな味がするー。」と苦笑いしながら一緒に食べたこととその時の父母の表情、笑い声は今でも忘れられません。